

3月の小張先生同様、3時間に及ぶ長丁場を田村先生お一人で担当していただく研究会となりました。まず、理論編でタスク・ベースの言語指導（Task-based Language Teaching, TBLT）がどのような考え方に基づいているのかについて講義いただきました。そして、それに続く、実践編では理論編で理解したことに基づいて田村先生が作成された教科書を例に、実際の授業を構想してタスクを活用してみるということで、1)教科書に掲載されている活動をアレンジしてタスクにする、2)教室で実際にタスクを使う際に教師に求められるであろうスキルを考える2つの活動をしました。

TBLTを行うに際して「何のためにその言語活動をするのか」教師が明確に意識していることが何より重要だと強調された後、タスクの定義を説明してくださいました。

先生が挙げられたタスクの定義は以下の4つ

1.意味中心であること：

言語習得の根幹は意味の理解／言語習得は暗示的なプロセスが主

2.ギャップがあること：

ギャップがコミュニケーションの必要性を生み出す。

3.学習者が持っている言語的・非言語的リソースに頼る：

リソースを使って理解や産出を行う仕組みがあること

4.明確に定義されたコミュニケーションの成果があること：

コミュニケーションの成果として何かが達成されたことがわかるようなゴールがあること

そして、なにより上の4つを踏まえたうえで、現実の言語使用に近い活動を行うことが重要だということ、ご自身の趣味であるサッカーのトレーニングを例に説明してくださいました。

講演の中で印象的だったのが「学習者を一人の人間としてリスペクトする」というTBLTに関わる教育思想のお話しでした。タスクの定義に沿って現実の言語使用に近い活動をするためには、ニーズ分析を基に教室の「外」を見据えた教育実践が必要になりますが、学校教育という時間的にも空間的にも制限のある枠組の中でそれを実現するには、教師の創意工夫が求められることとなります。その際に、タスク遂行に有効なリソースを与えすぎないよう気を付けなければならないとのことでした。なぜなら、与えすぎることタスクの定義3の「自身の言語リソースに頼る」機会を奪うことにつながってしまうからです。このお話を聞いて、授業をスムーズに運ぶためにリソースを与えることと学習者の力を信じることのバランスを取るのとは改めて難しいと考えました。（文責：戎妙子）

<紹介して下さった書籍>



学会からのお知らせ

2021 年度の役員は以下の通りです。

役職	役員
顧問（学会）	竹内 理研究科長・学部長・教授
顧問（総務委員会）	守崎 誠一研究科学務委員長・副学部長・教授
顧問（紀要委員会）	池田 真生子研究科教学主任・教授
会長	吉田 信介教授（英語）
財務委員長	*名部井 敏代教授（英語）
監査	沈 国威教授（中国語）
	今井 裕之副学部長・教授（英語）
幹事長	山中 由香（英語）
総務委員会	*近藤 睦美（英語） 楊 馳（中国語） 野村 正樹（英語）
財務委員会	岩田 弥生（中国語） 神道 美映子（中国語）
研究大会委員会	*竹田 里香（英語） 上野 舞斗（英語） 浜谷 佐和子（英語）
広報通信委員会	*戎 妙子（日本語） 山本 祐太（IT）（英語）
紀要委員会	*尹 惠彦（朝鮮語・日本語） 川光 大介（英語）

（*委員長）

< 編集後記 >

外教学会では Zoom を利用して研究会・研究大会を開催しましたが、Zoom は会当日のみならず、事前打ち合わせでも大活躍。吉田会長をはじめ研究大会委員会の皆さん、他の役員も昼間はそれぞれ仕事があるので、打合せは夜 20:00 から。こうした地道な活動が充実した会を支えています。企画に始まり、登壇してくださる先生方との交渉や調整から会の運営に至るまで、尽力してくれている研究大会委員会の皆さんに改めて感謝の意を表します。